

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成20年10月 第92号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

危機に瀕する米、そして介護

農薬やカビに汚染された『事故米』が、食用として広く流通している事が発覚しました。工業用糊の原料に限定して農水省から販売された事故米が、流通する過程で食用に転用され、高値で転売を繰り返して老人ホームや幼稚園の給食にも使用されていました。商道德や倫理・規範という言葉は全く死語になってしまいました。

古来より『米』は、日本人には特別な意味合いを持つ食糧でした。生産も流通も時の権力者や国が管理し、どこの家庭でも一粒の飯粒も粗末に扱う事を戒めていました。そして今でも、日本国内で自給できる唯一の食糧です。

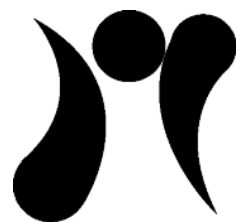
戦時中に制定された食糧管理法が時代に合わなくなり、1995年に食糧法に移行し、更に2004年の改正食糧法で米の流通・販売が自由化され、今回の事件では複雑な流通経路が仕組まれ、悪用されています。

1970年より施行された減反政策では、米の生産調整で転作を強く奨励してきましたが、補助金の削減による耕作放棄で荒れた農地が増え、農業生産に意欲を持つ農家が減っているように感じます。農業施策の基本には、米や農地を大切に扱う心や、農業に従事する誇りを育む理念が籠められているはずですが、現実はその正反対の結果が現れています。

今、全国の介護事業所で職員が定着せず、人材の確保に苦慮しています。介護の現場で、介護に喜びや魅力を感じ取れない介護職の苦悩が見え隠れしています。2000年に介護保険が始まり、5年後の見直しにより予防を重視して給付の削減を図り、持続可能な制度とする為に、医療や介護を必要としない高齢者を増やす事を目指しています。その中で今、介護現場が疲弊し、介護職が苦悩し離職して行きます。このままでは介護事業が立ち行かなくなり、20年後~30年後がピークの超高齢社会への準備が間に合いません。

(次ページにつづく)

せいりょう園 渋谷 哲



(前ページのつづき)

介護保険制度の基本には、介護を大切にすることを育む理念が籠っているはず。老いて介護を必要とするのは、自然の摂理であり、老いの喪失は、余分な力を削ぎ落として生き仏を目指す高僧の修行にも似た、尊い姿です。そして、人にとって老いと死は、運命として誰にも避けることは出来ず、避ける努力をしながらも、運命を受け入れる覚悟と準備が、老いの身にとってはより重要になります。そこでは、思想や価値観といった心の蓄えが問われます。それは短期間に備わるものではなく、長い期間の深い問い掛けの結果で用意できるものであり、人間のみが持つ尊い営みです。その老いの身を支える介護は、高い評価と深い喜びのある魅力ある行為であるはず。米を支える農業政策にも、介護を支える介護保険制度にも、多くの国民からは、制度の底に流れる理念が見えていないように思われます。むしろ、理念や思想が希薄なのではないか、とも感じます。

人は、理念や思想に沿って原理や原則を確立し、原理・原則に則って自らの行動規範を定め、日々の行動の中で喜びを感じ、誤りを戒め、より良き社会人として自律しようと努力します。

自由な市場での契約や業務であるからこそ、一人ひとりの倫理や行動規範が重要であり、その礎になる理念や思想が求められます。日本で唯一自給できる食糧の米、最も人間的な行為の介護、重要な社会システムを支える制度や施策の運用の中でこそ、理念や思想の発する明確なメッセージが、大きな意味と価値を持つのだと痛感します。国が多様な意見を調整して発する法文の中に、理念や思想が希薄な場合には、地方行政と現場にこそ、普遍性のある理念と明確なメッセージを発信する力が求められるのだ、と思います。

介護には価値と喜びと魅力があることを発信する介護現場であり、人生を終える場に寄り添い、人生が完結する喜びを分かち合える介護職でありたい、と心より祈念致します。

***** せいよう園 10月の行事 *****

- * **10月 3日(金) ひよひ手芸教室** * **10月 24日(金) 介護者の集い** *
- * **10月 4日(土) 園長との懇談** * **~テーマ 感染症について~** *
- * **10月 6日(月) 仏教講話** * **10月 27日(月) 理容の日** *
- * **10月 8日(水) 誕生会** * **10月 28日(火) 播磨学園奉仕活動** *
- * **10月 10日(金) 体操教室** *
- * **10月 12日(日) 長砂少年団秋祭り** *
- * **10月 15日(水) 昼食会(おでん)** *
- * **10月 17日(金) 外出の日** *
- * **ひよひ手芸教室** *
- * **10月 20日(月) 美容の日** *
- * **10月 22日(水) 運動会** *
- * **10月 23日(木) 郷土料理の日** *
- * **(鯛めし)** *



10月12日
☆秋祭り☆

平成20年度第2回グループホーム運営推進会議の報告

日時 平成20年9月27日(土) 14:00～16:00

場所 せいりょう園1Fホール

参加者 推進委員7名 入居者家族7名 職員4名

議題1. 行事報告

- ・介護者の集い
- ・加古川市主催敬老会
- ・夏祭り
- ・2市2町グループホーム総会

2. 実習生受け入れ実績

3. ターミナル報告 ・グループホーム憩 2例 まどか 1例

4. ひやりはっと事故報告

5. 認知症サポーター養成講座について

6. 意見交換

○家族から

*日勤、夜勤帯の職員数の配置についての質問有り (詳細を説明済)

*利用者の外出時の対応について

○せいりょう園(グループホーム)の基本的な方針として

- ・基本的には距離を置いて見守るようにしているが、短時間で帰宅される方も居られるので各々の方のパターンを把握した上で対応している。
- ・1時間以上経過して帰宅されない場合は所在確認のために探しに行く、解らない場合は警察等に協力を願うこともある。
- ・人が生きることの中で自由に外に出て歩き回することは、ごく普通の行動である。生きる権利の中には責任が伴う。

7. “9月20日 世界アルツハイマーデー記念講演会”の報告

演題 「認知症を生きる、いきいき生きる」思い出と身じまい

講師 栄 仁浩 医師

○早期発見と早期治療とアリセプト服用について

早期治療にアリセプト服用は適切であると思うが、同時に日常生活の中でのケアをどう組み立てていくのかも大事な要素になる。

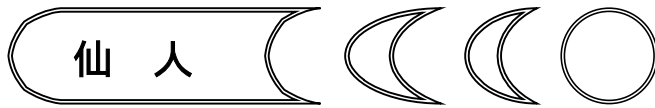


ケアハウス空き情報

<平成20年10月15日現在>

- | | | | |
|------------|-----------|-------------|-----------|
| ・めぐみ苑 | : 1人部屋 1室 | ・清華苑SPA-ライフ | : 1人部屋 1室 |
| ・シスナブ御津 | : 1人部屋 1室 | ・アゼリア | : 1人部屋 1室 |
| ・キャッシル真和 | : 1人部屋 1室 | | : 2人部屋 1室 |
| ・青山苑 | : 2人部屋 1室 | | |
| ・ウェルソングはりま | : 2人部屋 1室 | | |
| ・香楽園 | : 2人部屋 2室 | | |





地域支援センターのぐち南

社会福祉士 吉田 知一



「自分の住み慣れた場所で最期まで過ごす」ということを多くの人が望んでいるのではないかと思います。厚生労働省のアンケート調査では、6割の人が「自分の住みなれた家で、家族に看取られながら人生の最期を迎えたい」と望んでいるようです。しかし、なかなか望んだ通りにはいかず、実際には亡くなる方の8割は病院で亡くなられています。それだけ「自分の住みなれた場所で最期まで過ごす」ということは難しいことなんだと感じています。

老人ホームなどの施設入所の待機者数がどこの施設も100人以上の待ちとなっていますが、本来の介護保険のサービス、特に在宅サービスはひとり暮らしや高齢者のみの世帯でも、できる限り住み慣れた家庭や地域での生活が継続できるようにという前提で作られていますし、社会的入院が問題となっていた介護型療養病床は2011年には廃止され、多くの要介護者が退所しなければなりません。後期高齢者医療制度では在宅でも必要な医療を受けることが出来るように「高齢者担当医」いわゆるかかりつけ医を勧める取り組みなど、様々な制度が見直され病院・施設から在宅・地域へと急ピッチで移り変わっています。

簡単に「自分の住み慣れた場所で最期を迎える」とスローガンのようにどこでも掲げられている目標ではありますが、はたして在宅や地域にその受け皿があるのだろうか？そして我々にその心の準備が出来ているのだろうか？支援センターの相談員として関わったケースに、考えさせられたことがありましたので書きたいと思います。



支援センターに地域の民生委員さんから相談がありました。「地域に住んでいる一人暮らしの方で今にも死にそうな人がいるんです！！」、ただごとではない内容の相談でした。話を聞くとどうやら本人は90歳近いおじいちゃん、身寄りもなく自分の家で一人暮らしをされているようです。1ヶ月前から顔を見なくなったので、近所の方が心配して民生委員に知らせてくれたのがきっかけで、民生委員が訪問したところ倒れている本人を発見。会話は出来る状態なので「大丈夫か？」と聞くと「大丈夫」「ほっといてくれ」と答えるとのこと、救急車を呼ぶかどうか本人に確認すると「病院には行きたくない」と答えるそうです。民生委員としてこのままほっておいて良いのかどうか分からなくて相談に来たとのことでした。

何故、ほっておいて欲しいのか？本人のことをもっと知りたいと思い、私は本人のお宅を訪問することにしました。

本人宅の前まで来ると民生委員が私の目を見て「部屋の中がすごいことになってますけど・・・においとか大丈夫ですか？」と聞かれたので私は「汚いことにはあまり気にならないので大丈夫です」と答えました。ドアノブに手をかけドアを開ける—するとそこには頭はキレイに禿げ、顎はまっ白な長い髭を蓄えている仙人のような姿の方が、何故か三角座りで毛布にくるまった状態で横に倒れていた。仙人は横になったまま私達を上目使いで見ている、眼は白く濁っているが力を感じる、生きた眼をしている—

私は、仙人の下半身が裸であることに気づきました。おしっこも便も垂れ流し状態で、

痩せこけていて骨と皮といった状態です。手は真っ黒で爪の間には黒い硬がみっしり詰まっています。「なんでこんなことになっているんだ・・・」という思いが一番はじめの印象でした。

「大丈夫ですか？」一応、本人に声をかけてみました。この状態を見て大丈夫な訳がないだろうと思いましたが、本人の口から出た言葉は「私は大丈夫です。帰ってください」でした。民生委員の言った通りでした。「どこか痛いところはないですか？」と聞くと「痛くないです」と返答があり、「困っていることはないですか？」と聞くと「何も困っていない～」と。「寒くないですか？」と聞くと「寒い、寒い～」、「服を着替えましょうか？」と聞くと「ほっといてくれ～風邪をひく～」と答え「病院に行かなくて良いですか？」と聞くと「なんで？」と聞かれ「私にはしんどそうに見えます」と言う「勝手に決めるな～アホ～」とのことです。さらに「病院へ行ったら風邪をひく～どこにも行きたくない、ここにいたい」と言われました。

正直、悩みました。あきらかに健康な状態ではなく、人が生活するような環境ではありませんでした。この状態を見てすぐにでも救急車を呼ぶ人もいないだろうか、と思うぐらいです。

—しかし、本人は救急車を呼んで欲しくないのである。自分の名前も生年月日も答えることが出来るのだ。本人の判断能力は、有るとも言えるが糞尿まみれのこの状態をほっておいて欲しいということから、無いとも言える—

私は、一人ではどうしようもないケースであった為、多くの方に相談しどのような関わり方が仙人にとって良い選択なのかを話し合いました。その中で出た答えは、このままの生活を続けるにしろ、介護保険のサービスを受けるにしろ、病院へ行くにしろ、まずは人間らしい姿に戻ってもらおうということになり、本人の保清を第一に考えました。きれいな体で最期を迎えてもらおうという話になったのです。

本人はかなり嫌がっておられました。全身清拭し全着衣交換させてもらいました。仙人ではなく、ようやく人間らしい姿に戻られました。その時に「ありがとう」と一言、言っていただけでした。その後、仙骨部分に褥瘡があったのと足に痛みがあり骨折をしている可能性もあるということで、結局この方は病院に運ばれ数日後に亡くなりました。



仙人の望み通りの最期ではなかったかもしれませんが、私は病院へ運ばれることや病院で亡くなるのが悪いことだとは思ってはいません。ただ、我々が「選択肢を提示することが出来なかった」ということが問題なのだと感じました。仙人の希望通りの、このまま自分の住みなれた場所で過ごして死んでいくという自然な選択肢を我々が受け止めることが出来なかったのです。仙人だけではなく、多くの介護や看取りの場面で選択肢がない、選ばざるを得ない状況があります。だからこそ本人にとって何が良いのか、何が自然なことなのかを何度も話し合う必要があるのだと思いました。

医療・介護の現場では、本人が望んでいたとしても家族が望んでいたとしても望みどおりにはなかなかいきません。たとえ制度的に在宅生活を迫られる状況であったとしても、自分一人の問題ではなく、家族、地域、行政、事業者のそれぞれの思いや背景が複雑に関わり、社会のルールの中でどこまで実現可能なのかそれを探る必要があります。それが支援センターの相談員には求められているのだと思います。私たちが目指しているものは簡単に実現できることではありませんが、そこから逃げてはいけないことを学ばせていただきました。



仏教講話より



武井 博子



秋晴れの10月6日の仏教講話は、野口町・教信寺法泉院の長谷川慶悟住職をお迎えし、加古川と教信上人のゆかりについてお話いただきました。住職は教信上人にまつわるいろいろなエピソードに加え、当時の地理や時代背景などを話してくださいました。要旨は次のとおりです。

教信寺の祖・教信上人は、はじめ奈良の興福寺でお釈迦様の教えを懸命に勉強しておられました。当時の奈良は、シルクロードの終着点として世界の文化が集約されて栄え、東大寺をはじめ、立派なお寺が多く建立されました。

その華やかな中で教信上人は、勉強すればするほど矛盾を感じるようになられました。たとえば、一部の権力者によるお寺の建立。そもそも建立に充てられる財力は貧しい民百姓からの年貢米であり、苦しんでいる人々のための仏教ではなく、立派なお寺を建てるための仏教になっている、という疑問。

そこで全国行脚の旅に出られ、善光寺で阿弥陀さまから〈西へ行きなさい〉とのお告げを受け、836年、古代の山陽道・加古の駅（うまや）にたどり着きます。この地は、当時の交通手段だった馬の乗り換えの宿場町として栄えており、都を奈良から移すときは京都か加古川かと言われたほど交通の要でした。教信上人はこの地に866年に永眠されるまで30年間住まわれ、田植えや稲刈り、荷物運びなど人々の手伝いもされました。

当時、人々は苦しい生活のなかで、来世には極楽へ行きたいという願いを抱いていました。教信上人は、「南無阿弥陀仏」を唱えることで救われると、日本で最初期にお念仏で人々の心を導かれました。

長谷川住職は最後に、「教信上人は親鸞聖人や一遍上人をはじめ多くの人々に慕われ、いまでもゆかり深い教信寺には全国から多くの方が観光バスでお参りに来られます。皆さんも、教信上人がここ加古川からお念仏をはじめられたことを心に留め、誇りに思ってください」と話を締めくくられました。

教信寺は4月には樹齢100年の見事な桜、9月の野口大念仏会（ねんぶったん）に多くの人々で賑わいます。

このたび参加された近隣の方も、「ずっとこの地に住んでいるのに昔の歴史、地理的なことは知らなかった。聞いて興味がわいた。次回は仏教の話を知りたい」と感想を述べておられました。また、ご住職のお話の途中にせりょう園のご利用者が立ち上がり、身振り手振りをつけながら前に進み出て「夢々々のゆめまくら」と歌われました。その言葉が、ご住職のお話のなかに出てくる言葉だったのも印象的でした。

せりょう園待機者状況

<平成20年 9月30日現在>

判定済み者(278名)の内訳

グループ...103名

グループ...115名

グループ...55名

計273名

他施設入所...1名

死去...4名



○判定済待機者(273名)の内訳

在宅104名 / 特別養護老人ホーム入所中5名 / 医療機関入院中69名

老人保健施設入所中82名 / ケアハウス入居中4名

グループホーム入居中8名 / 有料老人ホーム入所中1名

介護現場発信情報

～かけがえのない^{ひととき}一刻を～

グループホーム憩の家



「今思うこと」 森本 まゆみ



介護の仕事をはじめて5年が過ぎました。最近つくづく思うことは介護という仕事は本当に難しいということです。百人いると百通り、いえそれ以上の介護があるからです。年々そういう思いが強くなっていくように思います。この仕事は人生の終末期というか、集大成の時期だからです。人間にとって非常に大切な、とてもデリケートな時期におけるお手伝いなのです。しかもその相手は私よりはるかに人生経験を積んでおられる、いわば大先輩なのです。どのような介護を望んでおられるのか、どのようにすれば満足のいく日々が送れ、安らかな最期を迎えられるのか、考えても考えても明確な答えは出てきません。

以前こんなことがありました。口癖のように「死にたい、死にたい」と言われた方がいらっしゃいました。入所されて日も浅く環境が大きく変わり、不安な気持ちで一杯だったのでしょう。戸惑っておられたのだと思います。ある時私はその方のおかれている状況、気持ちなど考えずにその時の私の気持ちをぶつけてしまいました。「死にたいなどと言わないで下さい。一生懸命お世話させてもらっているのに情けなくなります。悲しくなります。死にたいという言葉は私たちの一番聞きたくない言葉です」と。するとその方は二度と「死にたい」と言われなくなりました。家人さんにもそのことを伝えました。家人さんからは「ありがとうございます。これからもよろしくお願いします」との言葉をいただきました。その時の私はこれで良かったのだ、私の気持ちを理解してくれたのだと思いました。しかし、今考えてみますと本当にあれで良かったのか、私のエゴを押し付けただけではないのか、もっと他にフォローの仕方はなかったのか、自問自答の始まりです。

介護という仕事に同じ日は二度とありません。良くも悪くも日々変化します。その中で最善とは言えないまでも、少しでも最善に近づくよう後悔と自己満足、反省と自責の念にとらわれながら、ある時は原点に立ち戻り、ある時は先を見越して思考錯誤を繰り返す、精進したいと思います。一日でも多くこの仕事をしていて良かったと思えるように。(これも自己満足でしょうか?)

ユニット型特養より

「ユニット職員として」 嶋田 祐子



せいりょう園に働きはじめ早、丸5年が過ぎました。

最初の4年間はグループホームの職員として、昨年特養に異動となり今はユニットの職員として働いています。特養のユニット化により、個別ケアの充実をはかる点においては個々に必要なケアが少しずつなされてきているように思います。家庭的な空間を目標に利用者に関わり、ゆっくりと時間を共有する点ではまだ業務優先の部分があり、利用者の方々と深く関わりを持つ上で一番必要なことであり、これから2年目に入ってユニットケアが充実出来るよう努力していきたいと思っています。



ケアマネになって1年が経とうとしています。ケアマネに異動の話があった時は正直悩みました。こんなたよりない私にケアマネが勤まるのだろうか。月日の流れるのは早く何が何だか分からないまま、ケアマネの楽しさが分からないまま過ぎ去った感じがします。

異動して最初は全く何をしたら良いのか、分からない所が分からないという戸惑いや不安も一杯ありました。



相談室には利用者ご本人、ご家族、事業所、地域の方々等色々な所から相談の電話がかかってきたり、来訪されたりします。相談の内容も様々です。「インターネットで見たんだが、せいりょう園のリバティかこがわ、ケアハウス、グループホームについて教えて欲しい」「デイサービスに行きたいんだけど、どうしたら行けるのか」「住宅改修を介護保険を使ってしたい」等といった相談も少なくないです。自分に知識がない為、電話をとるのを躊躇したり受けても途中で代わってもらったりしたこと度もありました。そんな時あるケアマネより「知っているだけではダメ、きちんと理解していないから説明もできない」と言われました。確かにそうでした。自分が理解していないのでは相手も理解できない。自分がしっかり理解し、自分の言葉で説明できるようになりたいと思いました。それからは何回か相談と一緒に立ち合わせてもらったり、グループホームやケアハウス、リバティかこがわ、特養、ユニットケアの見学にも同行させてもらい、どのように他のケアマネが説明しているのか実際に見てみたりして理解を深めていきました。

そんなある日、自分の担当のケアハウスの方が末期のガンである事を家族から知らされました。長くて3ヶ月と言われたそうです。転倒が増え歩かれなくなり、食事も喉を通らなくなってきて状態が変化していく中、一緒に動いてくれていたケアマネが「今後のケアについての確認と統一の為、関わる人に集まってもらって話し合った方がいいよ」と言って一緒にカンファレンスに同席してくれる事になりました。1回目の時は家族も本人も何かあったら救急車で病院にという意向でしたが、2回目になると最期まで往診を受け痛みの緩和治療のみしてケアハウスで過ごさせてあげたいと意向が変わり、家族、訪問看護、ヘルパー、医師と皆で亡くなる日まで支援しました。話もできず頷いたりするくらいで水分を摂取するのも困難になっていき痛みもあったように思いますが、痛いとも言わずちょうど3ヶ月後に亡くなりました。ヘルパーが朝見回りに入った時には亡くなられていたようです。病院へ行かなくても良かったのかな、これで良かったのかなと思いましたが、亡くなられた時のやすらかできれいな顔を見ると良かったなぁと思いました。

1年経って多くの人から色々と学ぶ事が多く、できていない部分が見えてきた、分からない所が分かってきた、その段階まで来たように思います。これからも色々相談を受けたり、多くの人と関わっていく事と思います。少しでも専門的な知識や情報を身につけ、利用者の方々に提供できるように、またご家族の事もしっかり理解し、関わる事業所とも連携をとり、必要な時に必要な対応が敏速にできるように努力し、元気が与えられるケアマネになりたいと思います。